

社 会 科

水橋 長之

坂井 宏行

上谷 知未

研究協力者 加藤 隆弘(金沢大学)

1 ESDを進めるにあたって

平成20年1月17日の中教審答申では、社会科、地理歴史科、公民科の基本方針として、「持続可能な社会の実現を目指すなど、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することを重視する」と明記された。今日的課題としての防災やエネルギー問題が注目されている世相を反映し、社会参画の必要性が一層重要視されてきた結果であるといえる。このことはまさしく学習指導要領における社会科の目標である「国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」に直結するものであり、公民的資質の基礎に基づいて目指すべき国家・社会の在り方こそが、この答申に記された持続可能な社会であるといえる。社会科の目標を将来的な持続可能な社会の形成者の育成とみるならば、国立教育政策研究所が定めたESDの視点に立った学習指導の目標「持続可能な社会づくりに関する課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」と合致する部分が多く、目指すべき方向性は概ね一致しているといえる。また、前年度の本校研究紀要にまとめたようにESDの視点に立った学習指導で重視する7つの能力・態度についても、現行の学習指導要領及び解説から読み取ることができ、社会科の学習を通して身に付けさせる能力・態度と概ね一致している。以上のことから、これまでの社会科の学習指導の中に、ESDに関連する部分を明確に位置付けていくことで、ESDの視点を重視した学習指導のねらいを達成することができると考えられる。

ESDの研究は昨年度に続き2年目に入るが、昨年度の研究では主に教材のつながりとして、複数の教科でESDに関する共通した学習内容を扱い、問題解決的な授業の実践を積み重ねてきた。今年度はさらに、昨年度の研究を継続しながらも、能力・態度のつながりとして教科等の思考力・判断力・表現力等やこれまでの研究との関連についても明らかにすることにした。本校社会科では平成24,25年度の2か年間にわたり、国立教育政策研究所の教育課程研究指定校事業の指定を受け、「多面的・多角的に考察する力を育む指導と評価」を主題に、思考力・判断力・表現力等を高める指導と評価について研究を行った（『中等教育資料』平成26年6月号No.937参照）。こうした実績を踏まえ、本校が研究の中心に据えるESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度のなかでも「代替案の思考力」と「多面的、総合的に考える力」とを教科として特に重視することにした。これらは教科の学習を通して生徒に身に付けさせるべき思考力・判断力・表現力等との関係が深く、従来の研究内容とのつながりも強いためである。この2つの能力を教科の学習を通していかに生徒に身に付けさせていくかが今年度の研究課題となる。本研究では従来の思考力・判断力・表現力等を育成するための指導の工夫が、ESDに関する能力の育成にどのようにつながるかを明らかにしていきたい。

2 能力・態度の育成にあたって

(1) 中心的に扱う能力・態度について

社会科では、E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度のなかでも、特に「代替案の思考力」「多面的、総合的に考える力」の2つの能力を重視することにした。これらの2つの能力は国立教育政策研究所によると以下のようにまとめられている。

○代替案の思考力

合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、ものごとを思慮深く、建設的、協調的、代替的に思考・判断する力

○多面的、総合的に考える力

人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり（システム）を理解し、それらを多面的、総合的に考える力

一方、教科のなかで生徒に身に付けさせたい能力であるが、前述の中教審答申の中で、改善の基本方針として「社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する方向で改善を図る」とある。これは現行学習指導要領の根幹をなす考え方であり、ここで触れられている能力や態度の育成こそが社会科の目指すべきところであると考えられる。

以上のことから、中教審答申にある社会科で目指す公正な判断力の育成は「代替案の思考力」に、多面的・多角的に考察する力の育成は「多面的、総合的に考える力」にそれぞれ深く関わっていると考えた。このE S Dで重視する2つの能力は社会科の学習を通して育成するのに適しており、これらを中心的に扱うことにした。以下はこれらの能力の育成に向けた基本的な考え方である。

①代替案の思考力

建設的な代替案を構築するには「情報を収集・分析する力、手に入れた情報を根拠として適切に解釈を加える力」をE S Dの基盤となる力として社会科の特性を生かして培う必要がある。

そのためには授業においてさまざまなグラフや表、地図といった資料を意図的に扱い、それらを適切に読み取るための技術を生徒に身に付けさせること、何が根拠かを明確にしながら、論理的に思考できる学習課題を適切に設定していくこと、に努めなければならない。これらは一回の授業で生徒に身に付けさせられるものではなく、日々の授業のなかで修得させていくことが重要であると考えられる。

また、内容や単元の流れの中で適切な課題・場面を捉え、代替案を構築する機会を着実に授業に埋め込むことが必要である。これについては、価値判断を伴う学習課題、特に政策論題について批判的に考えていく授業の実践等が適している。さらに、後述する多面的・多角的な考察を取り入れることで、一面的ではない幅広い視点からのより公正な代替案をつくりだすことができると考える。

②多面的、総合的に考える力

社会科では学習指導要領の解説にもあるように、社会的事象が様々な面を持っていること（多面的）、そうした社会的事象を様々な角度から考察し理解すること（多角的）を相互に関連付けることで教科の目標とする能力や態度の育成を図っている。E S Dでは様々な面のつながりの理解を重視しているが、より総合的に考察するには社会科でいう「多角的」な事象の捉え方も重要である。

この力の育成のためには、社会的事象の側面が複数あり、かつそれを捉える立場が複数ある教材を用

いながら、生徒に思考させるための適切な課題設定を授業内で行っていくことが必要であると考える。

(2) 従来の研究とのつながりについて

本校社会科では将来を見据えた社会の形成者たるに必要な力を「社会の一員として自分の意見を持つために必要な力」とし、多面的・多角的に社会的事象を捉え、根拠に基づいて論理的に考察する力の育成について研究を進めてきた。前述の中心的に扱う2つの能力は、従来の研究の中で生徒に身に付けさせようとしてきた「根拠に基づいて考察する力」「多面的・多角的に考察する力」と共通する部分が多く、これまでの研究成果を活かすことでこうした能力の育成が可能であると考えられる。そこで本研究にあたり、以下の①～③に留意した授業実践に取り組んだ(図1)。

①根拠に基づいて考察する力

いかなる考察もその主張が曖昧で説得力に乏しいものだと適切な思考力が身に付いたとは言い難い。根拠を明らかにした論理的な考察は公正な判断を生み出し、「代替案の思考力」につながる。本校社会科では資料から得られた情報、既習事項、一般的な概念などを根拠とし、それを基に考察する力の育成を図るために、トゥールミンモデルを活用してきた。ただしトゥールミンモデルそのものの理解ではなく、D(根拠)、W(理由付け、解釈)、C(結論)を明確に分けることを目的とし、これらの3つの要素のみを扱った。そして複数の根拠を用いることで「多面的」な考察が、複数の立場から解釈することで「多角的」な考察が、それぞれ行われているかも判断できると考えた。これにより、根拠や解釈といった思考の流れが明確に可視化され、根拠の有無や解釈の妥当性について生徒の自己評価や相互評価が促される。また、こうした根拠の取り出し方にも力を入れ、資料読解の場面を積極的に授業に取り入れた。

②多面的・多角的に考察する力

社会科の思考力において根幹となるものであり、「多面的、総合的に考える力」につながる。本校では「多面的・多角的」という捉え方を「多面的」「多角的」の二つに分け、地理的分野は「多面的」、歴史的分野は「多角的」、公民的分野は「多面的・多角的」にそれぞれ捉えやすいと考えた。そして、多面的な考察→多角的な考察→多面的・多角的な考察→…というスパイラル構造を意識することで、1・2年時で「多面的・多角的」に考察する基本的な力が身に付き、それを土台に3年時の公民的分野では「多面的・多角的」により深い考察が促されると考えた。

また、こうした授業実践のための方

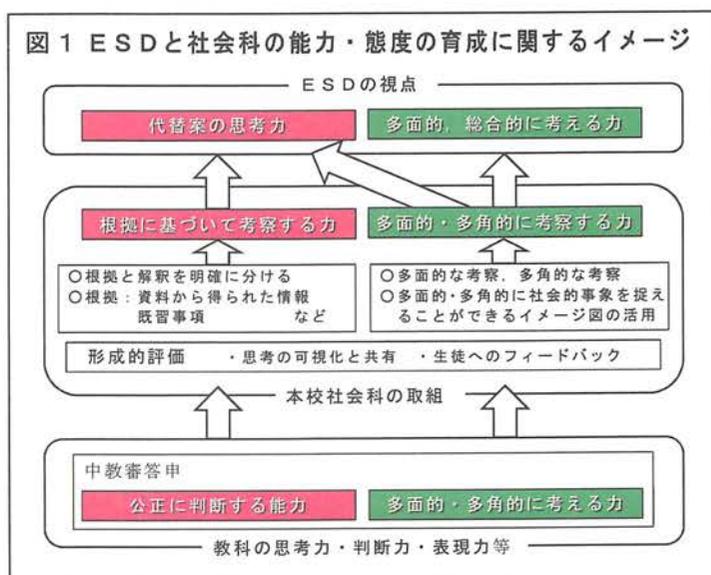
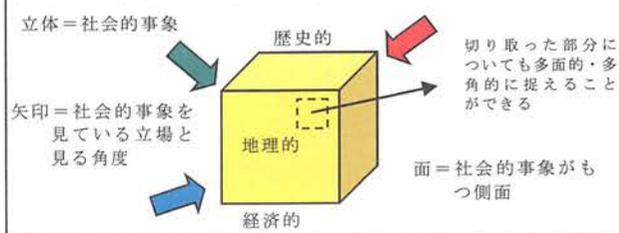


図2 「多面的・多角的」な事象の捉え方



策として、授業で扱うべき社会的事象の捉え方をイメージ図にまとめ（図2）、授業計画に活用した。これにより、よりの確に主題となる社会的事象を捉えることができ、多面的・多角的な考察の場面を設定しやすくなると考えた。

こうした多面的・多角的な考え方が生徒の日常生活に生かされていることも研究の成果として確認しており、ESDが目指すべき持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観の育成につながっていくと考えた。

③形成的評価

上記①②の能力の定着を図るには、適切な形成的評価を継続して行うことが重要である。そこで、生徒の発言内容やワークシート、レポートの記述内容等を評価対象として、それらの可視化、共有を図ることを考えた。具体的にはツールミンモデルの利用や板書の工夫、教材提示装置の利用があげられる。これにより生徒の自己評価や相互評価が容易になり、評価の妥当性を高めることができる。その際、多面的・多角的に考察しているか、根拠を明らかにしているか、根拠は妥当かといった点について評価するように促した。また、教師が評価したことを適時生徒にフィードバックすることで、生徒の学習意欲や自信につなげようと考えた。

④能力・態度の「つながり」について

今年度はESDに関連した単元・題材を扱うにあたり、社会科における思考力・判断力・表現力等を生徒に身に付けさせるために、問題解決的な学習を意識した。その際、二者択一による価値判断を伴う課題や、代替案、改善案を考えさせる学習題などを意図的に設定した。また、授業を構築する上で以下の点について意識した。

- ・単元、もしくは題材で取り扱いたい社会的事象は何か。
- ・社会的事象が持つ複数の側面の中から、授業で取りあげるものは何か（「多面的」に捉える）。
- ・考察させるときの立場は何か（「多角的」に捉える）。
- ・考察に必要な資料は何か（根拠を明らかにする）。
- ・考察に必要な生徒の活動は何か。

（3）教材の「つながり」について

昨年度作成したカリキュラムマップは、教科としてESDに関連する単元・題材をまとめたものである。それには環境やエネルギー、防災等すべての分野に社会科の単元・題材が含まれている。特に学習指導要領の中に「持続可能な社会」という言葉が明確に打ち出されている地理的分野や公民的分野の単元・題材がカリキュラムマップ上に多くみられた。社会科はESDの多くの分野で他教科との教材のつながりを図りやすい。社会科ではこうした特性を活かして、積極的に他教科へ情報を発信し、つながりのある授業を構築していく役割があると考えられる。

3 成果と課題

(1) 成果

①代替案の思考力の育成

本研究では代替案の思考力の育成にあたり、情報を収集・分析する力、手に入れた情報を根拠として適切に解釈を加える力を生徒に身に付けさせることを重視してきた。生徒へのアンケートによると、「何が根拠かの見分けがついていると思う」という生徒の割合は2年・3年ともに昨年度に比べて増加した（経年変化）。特に2年ではツールミンモデルを昨年度より利用してきたが、アンケート結果だけではなく授業の様子から資料読解や考察のまとめの時間の短縮等が確認でき、根拠に基づいて考察する能力の向上がみられた。また、3年でも今年度はツールミンモデルの使用を意識した実践を重ねたところ、根拠を見つけられない生徒の割合が昨年度の14%から3%に減少し、大幅な改善がみられた。代替案を考える上での基本的な能力が身に付いてきたと考えられる。

②多面的、総合的に考える力の育成

多面的、総合的に考える力の育成にあたっては、多面的・多角的に考察する力を生徒に身に付けさせることを重視してきた。生徒アンケートでは「多面的・多角的なものごとを考えられるようになったと思う」という生徒の割合は2年・3年ともに昨年度に比べて増加した。授業等の様子から特に1・2年では実際の能力の定着には疑問が残るが、全体的に多面的・多角的に考察しようとする意識は育ったといえる。

3年では昨年度までに比べて今年度は大きな改善がみられた。アンケートにおける多面的・多角的に考察した学習内容の記述も適切に書かれたものが多く、多面的・多角的に考察する力がある程度身に付いてきたと判断できる。これについては、従来の研究実践の積み重ねや、多面的・多角的に考察する場面を設定しやすい公民的分野の特性によるところが大きいと考えられる。また、アンケートの記述から「複数の教科で共通した教材を扱うことで多面的・多角的に教材を捉えられた」と感じた者もあり、3年の多くが社会科の学習内容と他教科の学習内容との関連を十分に意識したことで、多面的・多角的に考察する力が身に付いてきたとも考えられる。こうした教材のつながりについては全体の約7割の生徒が感じており、いずれの学年においても、学習の深まりや新しい発見につながったことがアンケートから読み取れた。中には、「社会科はどの教科ともつながる教科」と記述する生徒もみられた。多面的・多角的に考察する力や「つながり」に対する意識の向上がみられたことから、多面的、総合的に考える力が身に付いてきたと考えられる。

(2) 課題

①代替案の思考力の育成

代替案の思考力については、根拠を明確にして考察する力は生徒に身に付いてきたものの、今年度は実際に代替案を考える学習課題の設定が難しく、十分に設定することができなかった。実際に代替案を考える場面はこうした思考力を身に付ける上で不可欠であり、今後も代替案の思考力を問う教材の開発を継続していく必要がある。一方、限られた機会にこだわることなく、日々の授業のなかで、「他によりよい意見はないか」というような問いかけを意図的に繰り返してい

くことで、批判するだけではなく、よりよい代案を考えようとする態度を生徒に身に付けさせることができるのではないかと考えた。

②多面的，総合的に考える力の育成

多面的，総合的に考える力については，さらなる生徒への定着を図るために授業の改善を図っていく必要がある。多面的・多角的に考察する力の育成を意図した授業において，その構築プロセスを含めて授業の検証を行い，次の課題につなげる等，一步踏み込んだ形で改善策を進めていくことが考えられる。

③教材のつながり

今年度は教科間で教材のつながりを意識したところ，学習の深まり等の成果がみられた。教材のつながりを意識することの有用性を考えると，教科間のつながりだけではなく，小学校で学習した内容とのつながりを図ることも重要であると考えた。小学校の既習事項をくり返し学習するのではなく既習事項を生かしたより高度な授業実践を行うことで，より効率的な学習を進めることが可能となる。こうした教材のつながりをうまく整理してカリキュラムマネジメントにつなげていく必要がある。

次年度は上記の課題に対する取組を中心に，授業実践を進めていきたい。

H27 社会科学学習アンケート集計結果

アンケート対象 1年 156名 2年 153名 3年 154名
※単位は「%」、矢印は昨年度からの経年変化を示す

設問1 「多面的・多角的にものごを考えること」について、あなたにあてはまる文の記号に○をつけてください。

- ア 多面的・多角的にものごを考えられるようになったと思う。
- イ 多面的にはものごとを考えられるようになったと思う。
- ウ 多角的にはものごとを考えられるようになったと思う。
- エ どちらともできていないと思う。

	ア	イ	ウ	エ
1年	46	25	25	4
2年	50→54	18→10	29→34	3→3
3年	23→56	26→14	40→29	11→1

設問2 多面的・多角的にものごを考えるための「根拠」について、あなたにあてはまる文の記号に○をつけてください。

- ア 何が根拠かの見分けがついていると思う。
- イ 何が根拠かの見分けはだいたいついていると思う。
- ウ 何が根拠か見分けがつけられていないと思う。

	ア	イ	ウ
1年	21	76	3
2年	31→40	66→58	3→2
3年	10→31	75→66	14→3

設問3 あなたが、「多面的・多角的にものごを考えること」ができたと思う学習内容は、どの分野のどんな社会的事象ですか。また、どのように考えることができ、その結果どんなことが学べましたか、具体的に説明してください。

設問4 あなたは、社会科の学習内容のなかで、他教科の学習内容が深く関連していると意識したことはありますか。あてはまる記号に○をつけてください。また、「意識したことがある」という人は、どの教科の何という学習内容で活用したかも具体的に書いてください。

- ア 意識したことがある。
- イ 意識したことがない。

	ア	イ
1年	69	31
2年	59→65	41→35
3年	56→74	44→26

設問5 設問4で「意識したことがある」と答えた人は、その学習を通してどのようなことを学んだり、感じたりしたか書いてください。

設問6 昨年度より、ひとつの題材を複数の教科の授業を通して学習する機会がありました。このことについて、あてはまる記号に○をつけてください。

① 「ひとつの題材を複数の教科の授業を通して学ぶ機会」を通して、新たな気づきや学びがありましたか。

- ア 「新たな気づきや学び」が、たくさんあった。
- イ 「新たな気づきや学び」が、少しはあった。
- ウ 「新たな気づきや学び」は、ほとんどなかった。
- エ 「新たな気づきや学び」は、なかった。

	ア	イ	ウ	エ
1年	41	58	1	0
2年	48	49	3	1
3年	48	49	3	1

② 「ひとつの題材を複数の教科の授業を通して学ぶ機会」についてどのように感じていますか。

- ア ひとつの教科で学ぶより興味・関心が、とても高まる。
- イ ひとつの教科で学ぶより興味・関心が、ある程度は高まる。
- ウ ひとつの教科で学ぶより興味・関心は、あまり高まらない。
- エ ひとつの教科で学ぶより興味・関心は、高まらない。

	ア	イ	ウ	エ
1年	52	43	4	1
2年	43	52	5	1
3年	51	44	5	1

③ 「ひとつの題材を複数の教科の授業を通して学ぶ機会」についてどのように感じていますか。

- ア このような機会が、たくさんあったらよいと思う。
- イ このような機会が、時々あったらよいと思う。
- ウ このような機会は、ほとんどなくてよいと思う。
- エ このような機会は、なくてよいと思う。

	ア	イ	ウ	エ
1年	56	40	4	0
2年	57	39	4	1
3年	44	49	5	1

設問7 昨年度からの授業（全教科）を通して、「持続可能な社会をつくること」について、どのように感じていますか。

あてはまる記号に○をつけてください。

- ア 持続可能な社会をつくる大切さを、ある程度理解することができ、何らかの行動に移すことができた。
- イ 持続可能な社会をつくる大切さを、ある程度理解することができた。
- ウ 持続可能な社会をつくる大切さを、あまり理解することができなかった。
- エ 持続可能な社会をつくる大切さを、理解することができなかった。

	ア	イ	ウ	エ
1年	24	75	1	0
2年	22	77	1	1
3年	33	65	1	1

1 題材名 開発の進行とその影響（南アメリカ州）

2 ねらい

- ・アマゾンの森林伐採の理由を考察することで、南アメリカ州の経済的発展の現状を知り、森林伐採に対する多様な考え方を理解する。また、今後の開発の展望について考えることができる。

3 学習活動

(1) 世界の森林伐採の現状について理解させる

世界で起きている森林伐採について、伐採された森林の分布や面積といった統計資料から世界の現状について理解させた。生徒は植物の光合成について理科で学習しており、こうした既習事項から二酸化炭素の増加等の問題点について考えさせた。生徒からは森林伐採について、日本の中学生として「やめて欲しい」「自然を守るべき」といった意見が多くあがった。また、衛星写真の変化を追うことで、アマゾン開発の進展について確認し、その規模が大変大きく、社会問題に発展しうるものであることを理解させた。

(2) 問題解決場面

森林伐採の結果、道路や大豆畑が造成されていったことを衛星写真から確認した上で「なぜアマゾンでは開発による森林伐採が続いているのだろうか」という課題を設定した。ここではアマゾン周辺の交通網や農産物・鉱産資源、大豆の需給動向や価格の変化といった資料に基づいて考察させた。その際、トゥールミンモデルを用いて根拠となる事実と、それに対する解釈とを分けるよう指導し、論理的な考察を促した。また、個人での考察の後、グループで話し合う時間を設けて生徒同士の相互評価を行わせ、考察の改善を図った。

考察結果から、南アメリカ州では森林伐採による問題を抱えながらもアマゾンでの人々の暮らしの向上や経済的発展のために開発が続いているという現状を確認した。アマゾンの森林伐採について、日本人と現地の人々との2つの視点から多角的に捉えることで、森林伐採は環境を破壊する面ばかりだけではなく、現地では経済発展の一助となっている事実を理解させた。

4 ESDとの関連

(1) 構成概念

I 多様性…世界の地域の経済的・社会的背景はそれぞれ異なっており、そのため環境問題に対する考え方も多様であること

III 有限性…森林資源には限りがあり、伐採が進むことで様々な問題が生じること

(2) 能力・態度

③多面的、総合的に考える力

【教科の目標（評価規準）】

アマゾンの森林伐採の理由について、根拠を明らかにしながら多面的に考察している。

(3) 教材の「つながり」

①ESD関連分野 環境

②教科 理科，技術

③題材 「光合成」（理科1年），「社会から求められている本立てをつくろう」（技術1年）

1 題材名 江戸のエコ社会

2 ねらい

・江戸時代がリサイクル社会であった背景について考察することで、江戸時代の社会について理解を深める。

3 学習活動

(1) 現代と江戸時代の社会の違いについて理解させる

「エコ社会」という言葉の意味について共通理解を図り、その上で「エコ社会」を目指している現代社会のエコではない点について着目させた。生徒からは「多くのものを輸入し、大量生産・大量消費が行われている」「大規模な開発が行われている」などの意見が挙がった。

次に江戸時代の暮らしについて説明し、当時の社会は現代社会とは大きく異なり、職業の細分化、リサイクル、少ない廃棄物といった特徴を持ち、循環型社会であったことを理解させた。

(2) 問題解決場面

「なぜ江戸時代は現在でいう『エコ社会』になっていたのだろうか」という課題を設定し、既習事項に基づいて考察させた。その際、根拠となる事実と、それに対する解釈を分けるよう指導し、論理的な考察を促した。個人での考察の後、何が根拠となっているか、解釈が適切になされているか等についてグループで話し合う時間を設け、生徒同士の相互評価を行わせた。

また、話し合いを通して様々な意見にふれさせることで、自分の考察以外の新しい面について気付かせる機会とした。

生徒からは、産業の面では技術が未発達なための大量生産の難しさ、経済の面では度重なる貨幣価値低下による物価高、国際関係の面では鎖国による原料・資源確保の限界などが理由としてあがった。また、化石燃料の利用技術の未発達や木材利用が中心であった点等を指摘する生徒もみられた。

4 ESDとの関連

(1) 構成概念

Ⅱ相互性…産業、経済、国際関係などが相互に作用しながら江戸時代の循環型社会を形成していたこと

Ⅲ有限性…江戸時代は限られた資源を有効に活用するために、リサイクル活動がさかんに行われていたこと

(2) 能力・態度

③多面的、総合的に考える力

【教科の目標（評価規準）】

江戸時代が現在でいう「エコ社会」となっていた理由について、既習事項を生かしながら根拠に基づいて考察することができる。

(3) 教材の「つながり」

①ESD関連分野 環境

②教科 国語

③題材 「江戸からのメッセージ」（国語1年）

1 題材名 世界の資源と日本
2 ねらい ・将来の日本の理想的な電力構成について考察することで、エネルギー資源をめぐる日本の現状や発電方法について理解する。
3 学習活動 (1) エネルギー資源に関する日本の現状と発電方法の違いについて理解する 前時において、日本では資源がほとんど産出されないため、資源確保のためにどのような努力が必要かについて学習した。本時では前時の復習から、資源の輸入に依存しなければならない一方で、大量の電力を消費していることを理解させた。その上で、火力、原子力、再生可能エネルギー（水力、その他）の発電方法の違いや長所・短所について説明した。 (2) 問題解決場面 「日本の理想的な電力構成はどのようなものだろうか」という課題を設定し、15年後の日本の理想的な電力構成を考えさせた。ここでは、先入観を与えないため、日本以外の地域（米、中、独、仏、伯）の例だけを示し、発電方法の違いや日本の地理的特色等から自分の意見を持たせた。その後、4人の小グループ内で意見交換を行わせ、多様な考え方に触れさせた。次により現実的な構成に近づけるために現在の日本の電力構成を生徒に伝え、それも参考にしながらグループ内で課題について意見をまとめさせた。 グループ内の話し合いの論点として「原子力発電をどうするか」「再生可能エネルギーにどの程度の可能性を見いだすべきか」「環境にどれくらい配慮すべきか」「十分な発電量をどう確保するか」などがあがった。 本時の課題については正解というものはないが、最後に1つの例として資源エネルギー庁による2030年度の電力構成を示した。その上で、こうした問題に向き合っていかなければならない日本の現状を伝えた。
4 ESDとの関連 (1) 構成概念 Ⅰ多様性…発電にはいろいろな方法があり、それぞれの長所を生かしながらいまうまく組み合わせることで、よりよい電力構成が考えられていること。 Ⅲ有限性…エネルギー資源は有限であり、将来の発展のためには効率よく運用していく必要があること。 (2) 能力・態度 ①代替案の思考力 ③多面的、総合的に考える力 【教科の目標（評価規準）】 将来の日本の理想的な電力構成について、日本の地理的特徴や発電方法の違いから多面的に考察することができる。 (3) 教材の「つながり」 ①ESD関連分野 エネルギー ②教科 技術 ③題材 エネルギー変換のガイダンス（技術2年）

<p>1 題材名 資源・エネルギー問題</p> <p>2 ねらい 資源・エネルギーの需給をめぐる現状と課題をふまえ、今後のエネルギー政策に必要なとされる考え方を持つことができる。</p> <p>3 学習活動</p> <p>(1) 学習課題を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国民、企業、電力会社、それぞれの立場から、望ましい電源構成をツールミンモデルを用いたワークシートにまとめてくる。(宿題) ・学習課題「15年後の日本の『電源構成のベストミックス』を考えよう。」 <p>(2) 学習課題について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4人グループ内で、あらかじめ設定した立場からそれぞれ意見を発表する。 国民2名、企業1名、電力会社1名 ・グループ内の4人とも政府の立場から電源構成のベストミックスについて考え、政府としての意見をまとめる。その際、3つの立場の意見等をふまえて電源構成を考えさせる。 ・10グループごとの意見を発表する。他のグループの意見を聞き取る。 <p>(3) 学習課題についてまとめる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・15年後の日本社会にふさわしい「電源構成のベストミックス」について自分の考えを有権者の立場からワークシートにまとめ、数名が発表する。 <p>本時では、各自の立場と諸資料にもとづいて予想した15年後の日本の電力構成を他者と共有し、それらの意見をふまえて政府としての電力構成を考える。そのことを通して「未来像を予測し計画を立てる力」を養う。社会科の授業で身に付けさせる思考力に、「社会的事象の意味や意義を解釈する力」がある。本時では、日本のエネルギー政策（電力構成）を、様々な立場から多面的に捉えさせ、その意味や意義を解釈させる。</p> <p>言語活動として「発表（説明）」を行うが、その際、ツールミンモデルを取り入れたワークシートを用いることで根拠を明確にした考察を促す。また、それらをスクリーンに映し出して可視化することで、生徒に思考の過程を共有させる。</p> <p>4 ESDとの関連</p> <p>(1) 構成概念</p> <p>I 多様性…発電方法にはいろいろなものがあり、それぞれの長所と短所を考えながら組み合わせることで、様々な電力構成が存在すること。</p> <p>III 有限性…エネルギー資源は有限であり、将来の発展のために効率よく利用する必要がある。</p> <p>(2) 能力・態度 ②未来像を予測して計画を立てる力 ③多面的、総合的に考える力</p> <p>【教科の目標（評価規準）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後のエネルギー政策には持続可能な社会を形成するという考え方が必要であることに気づき、将来の電源構成を考えている。 【観点② 思考・判断・表現】 ・電源構成の理由を裏付ける事実を読み取ることができている。【観点③ 資料活用の技能】 <p>(3) 教材の「つながり」</p> <ul style="list-style-type: none"> ①ESD関連分野 エネルギー ②教科 英語 理科 ③Clean Energy Sources（英語3年） いろいろなエネルギーと移り変わり（理科3年）
--

1 題材名 九州地方

2 ねらい

- ・九州地方の土砂災害の原因と対策について考察することで、九州地方の地域的特色について理解する。

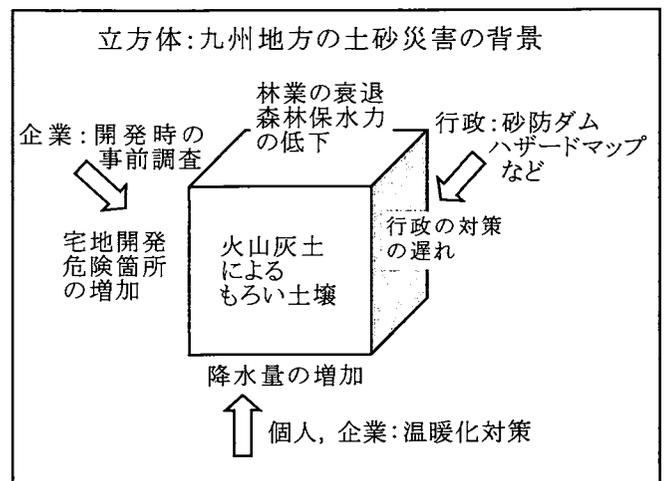
3 学習活動

問題解決場面

「九州地方で多発する土砂災害と人々の生活にはどのような関わりがみられるか」という課題を設定し、九州地方の土砂災害の原因と対策について考えさせた。特に原因に関する一般的共通性については複数の資料を用いて考察させることにした。その際、根拠となる事実と、それに対する解釈とを分けるよう指導し、論理的な考察を促した。また、個人での考察の後、何が根拠となっているか、解釈が適切になされているか等について話し合う時間を設け、生徒同士の相互評価を行わせた。

この課題では、自然的条件として近年豪雨の回数が増加していること、社会的条件として宅地開発による災害危険箇所の増加や林業の衰退による森林の保水力低下、行政の対策の遅れがあげられる。こうした条件が互いに作用し合うことで土砂災害が発生しているということを理解させた。

また、さまざまな立場を意識させながら土砂災害への対策について考えさせた。



4 ESDとの関連

(1) 構成概念

I 多様性…同じ日本国内でも地域によって自然、産業、文化等はそれぞれ異なり多種多様であること。

II 相互性…人々の生活はその地域の気候や地形といった自然条件や、それ以外の社会的条件が相互に関わり合っていること。

(2) 能力・態度

③多面的、総合的に考える力

【教科の目標（評価規準）】

九州地方の土砂災害の原因を多面的に考察し、多角的にその対策について考えることができる。

(3) 教材の「つながり」

①ESD関連分野 防災

②教科 保健体育、家庭

③題材 「自然災害への備えと避難」（保健体育2年）、「衣食住の工夫」（家庭2年）

1 題材名 都市の繁栄と元禄文化
2 ねらい ・元禄文化がおこった背景について考察することで、江戸時代の社会について理解を深める。
3 学習活動 (1) 元禄文化の特徴について理解させる 都市の繁栄については前時で産業の発展と関連付けて学習した。本時では元禄時代の説明と元禄文化の特徴を理解する所から始めた。綱吉の文治政治を背景に、上方で新しい文化がおこったこと。文学作品や絵画の題材から当時の文化が町人を中心としたものであったことについてそれぞれ確認した。 (2) 問題解決場面 「なぜ上方で町人を担い手とする文化がおこったのか」という課題を設定し、既習事項に基づいて考察させた。ここでは浮世絵のような独特の風情を描く芸術作品がつけられた背景について、政治・経済・国際関係等から多面的に元禄文化を捉えさせた。 その際、ツールミンモデルを用いて根拠となる事実と、それに対する解釈を分けるよう指導し、論理的な考察を促した。個人での考察の後、何が根拠となっているか、解釈が適切になされているか等についてグループで話し合う時間を設け、生徒同士の相互評価を行わせた。また、話し合いを通して様々な意見にふれさせることで、自分の考察以外の新しい面について気付かせる機会とした。 ここでは根拠として、幕府が鎖国を行い海外との接触を制限したこと、大阪や京都が都市として発展したこと、諸産業が発達して貨幣経済が浸透した結果町人が台頭したことがあがった。生徒はそこから鎖国により海外文化の影響が少なかったこと、大阪・京都の経済的な発展がそこでの文化を生み出したこと、町人の生活に精神的・経済的な余裕がでて文化の主体になったこと、などを理由として考えた。
4 ESDとの関連 (1) 構成概念 Ⅱ相互性…政治、経済、国際関係などが相互に作用しながら町人を中心とした江戸時代の文化を形成していたこと (2) 能力・態度 ③多面的、総合的に考える力 【教科の目標（評価規準）】 元禄文化がおこった理由について、既習事項を生かしながら根拠に基づいて考察することができる。 (3) 教材の「つながり」 ①ESD関連分野 世界遺産・地域文化財 ②教科 美術 ③題材 鑑賞（美術2年）

<p>1 題材名 伝統文化の継承と創造 ～伝統文化を保存・継承する意味や意義とは～</p> <p>2 ねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 伝統文化を保存・継承する意味や意義について理解し、伝統文化と自分とのこれからの関わりについて考えることができる。 <p>3 学習活動</p> <p>(1) 学習課題を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 観能教室で能楽を見た感想から、能と狂言のイメージをそれぞれ発表する。 ・ 能楽をもう一度見に行きたいかどうかの立場を、黒板にネームプレートを貼って示す。 ・ 金沢市で市内の全ての中学3年生に能楽を鑑賞させている理由を考え、発表する。 ・ 学習課題「伝統文化の継承にはどんな意味や意義があるのかを、金沢にも根付いている『能』を通して考えてみよう。」 <p>(2) 学習課題について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 能について知っている知識や理解を、他教科（国語、音楽）での既習事項を含めて確認する。総合芸術であること（謡、舞、劇、面、囃子）、室町時代に成立したこと（観阿弥・世阿弥父子により大成、足利義満の保護を受ける）散楽、田楽や猿楽をもとにしていること 能楽師と流派（家元制）があること 演目は約250曲あり、演目は5種類に分けられること 世界無形文化遺産としてわが国の第一号として指定されたこと など ・ 能の価値は何か、なぜ後世に残すべきなのかについて考え、発表する。 ・ 能を体験したテレビ番組（10分）を見て、能の価値を読み取り、発表する。 ・ 能の各演目の出典やテーマ、後見の役割などから、能の価値を掘り下げて考える。古典を継承していること 亡者・弱者への供養の心がこめられていること <p>(3) 学習課題についてまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 能は、現在どのような人たちによって、どんな形で継承されているか資料から読み取る。 ・ 伝統文化を継承することはなぜ大切なのか。また、あなたは、金沢の伝統文化のひとつである「能」とこれからどのように関わっていきたいと考えるか。これらについて、ワークシートに考えを記入し、発表する。 <p>4 ESDとの関連</p> <p>(1) 構成概念</p> <p>I 多様性…伝統文化のひとつである「能」は総合芸術として捉えることができ、多種多様なものごとから成り立っているものとして継承されていること。</p> <p>(2) 能力・態度 ②未来像を予測して計画を立てる力 ③多面的、総合的に考える力</p> <p>【教科の目標（評価規準）】</p> <p>①伝統文化を保存・継承する意味や意義について、能を通して多面的・多角的に考察することができる。</p> <p>②伝統文化と自分とのこれからの関わり方について、具体的に考えることができる</p> <p>(3) 教材の「つながり」</p> <p>①ESD関連分野 世界遺産・地域文化財</p> <p>②教科 音楽 国語</p> <p>③題材 能の魅力を探ろう（音楽3年） 能「羽衣」をよみ、能について考えよう（国語3年）</p>
--

1 題材名 寒暖の差が激しい土地にくらす人々

2 ねらい

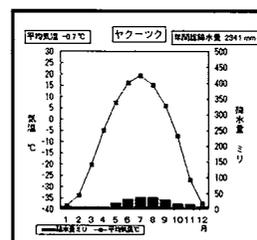
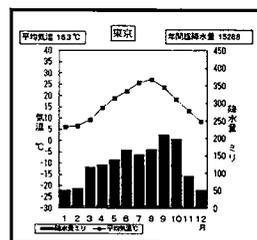
自然的条件に適応したくらしとはどのような生活なのかを、様々な資料から多面的にとらえることができる。

3 学習活動

(1) 雨温図の確認

冷帯について、雨温図から日本の気候との違いを確認する。

東京とヤクーツクとの比較で、気温の年較差が大きいこと、冬は-20度まで下がることをグラフから読み取らせる。



(2) 課題「氷点下の環境で生活する人々の工夫を探ろう」

映像により、冷帯の特徴(タイガの広がり、永久凍土)について知る。

映像(オイミヤコンの生活、ダーチャのくらし)や資料写真から、自然環境との関わりの中で、人々の生活の工夫について考察する。

- ・凍らない川の水を利用
- ・夏に野菜を栽培する
- ・夏野菜を塩漬けにし、保存食とする
- ・魚を捕っている
- ・木造住宅
- ・窓は二重窓
- ・高床になった住宅

(3) 自然環境の変化

森林伐採などの開発によって、タイガの森にアラス(湖)が広がるなど、冷帯においても地球環境問題が見られることを知る。

また、こうした環境変化の中、古い木造住宅が傾くなど、人々の日常生活に自然環境が大きく関わっていることを考える。

4 ESDとの関連

(1) 構成概念

I 多様性・・・世界には、様々な自然環境、文化がみられること。

III 有限性・・・人々の生活においては、限りある資源を使っていること。

(2) 能力・態度

③多面的、総合的に考える力

【教科の目標 (評価規準)】

写真や映像資料、雨温図などから、日本の自然環境との違いを理解するとともに、冷帯の人々の生活について、多面的に考察し、発表することができる。

(3) 教材の「つながり」

①ESD関連分野 国際理解

②教科 英語、家庭

③題材 「国際フードフェスティバル」(英語1年)、「食文化」(家庭1～3年)

1 題材名 効率と公正 ～学校のトラブルについて考えてみよう～

2 ねらい

限られた資源を有効に活用するためにはどうしたらよいかを、批判的に考えることができる。

3 学習活動

(1) 学習課題を知る。

・学校でのトラブルについて、資料から内容と原因を読み取る。

トラブルの内容は、3つの部活動（ソフトボール部、サッカー部、陸上部）の代表者がグラウンドの使用割りをめぐり対立していること。トラブルの原因は、校舎の耐震化工事のためグラウンドの一部が使用できなくなっていることと、地区大会3日前でどの部もグラウンド全面を使用した練習がしたいという要望があること。

・学習課題を知る。

3つの部活動が納得して練習できるグラウンドの使用割りを考えよう。

(2) 学習課題について考える。

・対立を解決するため（合意形成を図るため）に必要な考え方である「効率」と「公正」の意味をそれぞれ理解する。

・ワークシートを用いて、「効率」と「公正」の考え方に基づいて各自で解決策を考える。

・各自の解決策に問題点がないか考える。

・解決策を発表する。その際、ワークシートを教材提示装置でスクリーンに拡大表示する。

・それぞれの解決策の問題点を指摘し合う。

(3) 学習課題についてまとめる

・それぞれの解決策の問題点を改善する方法（修正案）を考える。

・問題点を改善する意見を付け加えた上で、最もすぐれた解決策（修正案）を、クラス全員で決定する。

・実際の学校生活の中で、似たようなトラブルがないか考え、発表する。

4 ESDとの関連

(1) 構成概念

Ⅱ相互性…グラウンドで3つの部活動が練習するには、使用割りが必要なこと。

Ⅲ有限性…耐震化工事のため、使用できるグラウンドの面積が通常の半分であること。

Ⅳ公平性…3つの部活動とも機会や結果について平等に扱うべきであること。

Ⅴ連携性…3つの部活動が互いに連携・協力することで、安心して練習に取り組めること。

(2) 能力・態度 ① 代替案の思考力

【教科の目標（評価規準）】

①「効率」と「公正」の意味をそれぞれ理解している。

②資料から読み取れる情報と「効率」と「公正」の考え方に基づいて、3者ともが納得する解決策を考えることができる。

(3) 教材の「つながり」

①ESD関連分野 その他（見方、考え方）

②教科 全教科

③題材 対立が生じている社会的事象を取り扱う題材や単元